

2020 年度事業 進捗報告書（実行団体）

- 提出日 : 2022 年 10 月 4 日
- 事業名 : 大人の TERAKOYA
- 資金分配団体 : 公益財団法人ちばの WA 地域づくり基金
- 実行団体 : 株式会社ベストサポート

① 実績値

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況*
社会的養護下にある、もしくは社会的養護下にあった若者のニーズ、地域のニーズを把握する	①調査した若者の人数	①100 名	2022 年 9 月	① 72 名	4
	②収集した事例数	②3 件	2022 年 9 月	② 1 件	
	③居場所の利用者数	③月 10 名 年間 120 名	2023 年 3 月	③ 864 名	
	④施設及び里親家庭への訪問件数	④月 1 件 年間 12 件	2022 年 9 月	④ 26 件	
若者が社会で活躍するために必要なスキル獲得のためのプログラムが実施させる	①一連のプログラムの有無	①一連のプログラムが出来ている	2022 年 3 月	① 9 連続開催	2
	②個別アセスメントの実施人数	②20 人	2024 年 1 月	② 21 人	
	③適性診断の実施人数	③20 人	2024 年 1 月	③ 12 人	
	④連続講座の受講者数	④20 人	2024 年 1 月	④ 74 人	
	⑤就職マッチングの件数	⑤20 人	2024 年 1 月	⑤ 78 人	
			2024 年 1 月	⑥ 0 人	

	⑥インターンの人数	⑥20人			
社会的養護下の若者について 理解する企業が増える	①出前講座に参加した企業数 ②相談を受けた企業数 ③インターン受け入れ表明をする企業数 ④連続講座実施における協力企業数 ⑤スモールサン及び中小企業同友会での事業の説明回数	①3か月1回 年間40企業 ②20社 ③100社 ④24社 ⑤25回	2024年1月 2024年1月 2024年1月 2024年1月 2024年1月	① 14回 77企業 ② 10社 ③ 12社 ④ 6社 ⑤ 14回	2
社会的養護下の若者について 知っている住民が増える	①地域住民に対する講座開催数 ②講座に参加した地域住民の人数 ③回覧板にて情報提供をした回数 ④イベントの開催数 ⑤イベントの参加者数 ⑥ホームページ、SNS等の閲覧者数	①3回 ②60人 ③25回 ④24回 ⑤240人 ⑥ホームページ 500人 SNS 閲覧数 3000回、SNS フォロワー100人	2024年1月 2024年1月 2024年1月 2024年1月 2024年1月	① 2回 ② 47人 ③ 9回 ④ 10回 ⑤ 27人 ⑥ インスタフォロー-74 Facebook いいね 396 YouTube 登録 82	3

*進捗状況：1 計画より進んでいる、2 計画どおり進んでいる、3 計画より遅れている、4 その他

② 事業進捗に関する報告

1. 事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
2. 概ね達成の見込み
2. アウトカムの状況
A: 変更項目 <input checked="" type="checkbox"/> 変更なし <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの内容 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの表現 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの指標 <input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値
5. 新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
①換気、手指消毒を徹底した。 ②施設訪問に際して、少人数での訪問等にし、コロナ不安の解消に努めた。 ③施設、子どもへのニーズ調査などは対面を避け、アンケート方式へ切り替えた。 ④施設や関係者との情報交換等においては、オンライン（ZOOM）を活用し、非接触でやりとりを実施した。

③ 広報（※任意）

1. メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）

【新聞】

7月6日中日新聞、7月8日（毎日新聞、信濃町新聞）、7月12日中部経済新聞、7月15日宮崎日日新聞、7月25日東京新聞、8月24日岩手日報

【TV】

5月25日千葉テレビ

2. 広報制作物等

3. 報告書等

2020 年度事業 中間評価報告書（実行団体）

評価実施体制

内部／ 外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	数字データの把握、関係者インタビュー、中間評価報告書作成	金親 奈々	株式会社ベストサポート
内部	関係者インタビュー	中岡 梢	株式会社ベストサポート
外部	事業評価	森山 直人	学校法人植草学園 植草学園大学発達教育学部
外部	事業評価	末木 智	社会福祉法人鳳雄会 児童養護施設 ほうゆう・キッズホーム
外部	事業評価	川村 一矢	千葉市生活自立・仕事相談センター稲毛
外部	事業評価	平林 智之	ファミリーホーム「実感デイズ」
外部	事業評価	杉下 雅雄	社会福祉法人房総双葉学園 児童養護施設「房総双葉学園」
外部	事業評価	桐丘	千葉市東部児童相談所・西部児童相談所
外部	事業評価	齋田 由美	生活クラブ風の村 ちばアフターケアネットワークステーション CANS
外部	事業評価	萩原 直哉	株式会社オプティアス
外部	事業評価	鈴木 稔	株式会社パセリ

A) 事業のアウトカムの進捗状況の評価

① 短期アウトカムの進捗状況

アウトカムで捉える変化の主体	指標	目標値	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
<p>本事業の支援プログラムを終了した若者が、働く上で必要な知識や技能を有している。</p>	<p>①適正診断によって把握した自身の適正に基いて、自分のやりたいと思える職業が見つかるか（を指標として短期アウトカムが生まれたかどうかを測る）</p> <p>②講座内容に関して、若者が興味関心を抱いた分野を運営側が詳細に把握できているかどうか（を指標として短期アウトカムが生まれたかどうかを測る）</p>	<p>①10人</p> <p>②把握した内容をプログラムの改善につなげていく</p>	<p>2024/1/1</p>	<p>①0人</p> <p>児童養護施設に入所しているある若者数名が、初期値は児童養護施設の職員に促されての参加であったが、就労支援プログラムを受講して施設に帰ったあと、施設の職員に「楽しかった」「また参加したい」と話すなどの積極的な姿勢が見られるようになった。</p> <p>一方で、以下の改善点が挙げられる。職業適性検査により適正は把握出来ているものの、①「働く」ことに対する意味づけなどが不十分である②児童養護施設退所まで時間がある子どもは、「自分がやりたい、なりたい」と思える職業がみつからない、もしくはどんな職業があるのかが見えていない。就労支援プログラムが後半に入る。場所や実施者に慣れてきたので、後半は実際の職業体験や職場見学などにつなげ、本人たちにリアルを届ける必要がある。</p> <p>②高度な知識や技能よりも、場に慣れたり、実施者に慣れるなど「就労支援プログラム」に参加することが第一優先であることがわかった。場が楽しい、居心地が良いことを優先に</p>

				休むことなく参加してもらえよう内容にしていく必要がある。
企業が若者の就労を受け入れる体制を整えている	①本プログラムでの働きかけによって、若者の就労を受け入れる体制を整えた企業数 ②本プログラムでの働きかけによって、若者の就労を受け入れた企業数	①100社 ②10社	2024/1/1	①8社 企業とのつながりの構築において、本事業のスタート前には、「福祉」とのつながりを持ったり、繋がろうとする企業は少なかった。しかし、企業を回り、丁寧に説明をすることで、相談に乗ってくれたり、インター受け入れを表明してくれる企業が出てきた。また、理解を示してくれた企業が、他の企業を紹介してくれるケースも出てきており、更なる広がりが期待できる。 ②0社 就労支援プログラムの1クール12回が終わっていない状況のために就職には繋がっていない。また、参加者の中で高校3年生が2人しかいないことを考えると2022年度の就職数は限定的である。2023年度の就労支援プログラムにつながるようなアプローチが必要と感じている。
居場所において地域住民が若者と交流している。	①継続的に居場所に来る地域住民の数 ②ボランティア登録者数 ③若者が主導して企画した地域住民との協働活動の数	①10人 ②25人 ③1回	2024/1/1	①地域のつながりから、自治会の主要メンバーには認知されており、足を運んでくれる人が6人はいる。今後はこのメンバーを軸に、更に多くの人に足を運んでもらえるような声掛けや周知をしていく。 ②「子ども食堂みたいなことをやりたい」と言ってくる若者が一人出てきた。この若者と住民を引き合わせながら、若者がやりたいことの実現をサポートしていく。



⑤ アウトカムの分析「⑧アウトカムの達成度」(※任意)

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察



事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
<p>事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成の見込みがある</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である</p> <p><input type="checkbox"/> 短期アウトカムの目標値の達成は難しい</p> <p>と自己評価する</p>	<p>当初予定していた「高度な知識の習得」という点においては変更が必要なものの、就労支援プログラムに参加している若者から「また参加したい」との声があり、就労プログラム参加は、定着しつつある。毎回参加しながら、多くの職業、会社に出会うことから、自分のなりたい職業を見つけたり、「高度」ではないものの「働く意欲」「挨拶」「コミュニケーション能力」など働く上で必要なスキルは身に付きつつある。毎回参加できることが維持できれば、短期アウトカム達成に大きく寄与する。</p>

B) 事業の改善状況の評価

① 事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の 適切性	目指している短期アウトカムに近づいているか。	評価の結果、知識や技能を有しているかどうかよりは、児童養護施設等以外での大人の関わりが持てているか、社会に出てあとに訪れ困難時に「SOS」が出せる場所や人がいるかが大事であるとわかった。	<p><調査結果></p> <p>学識経験者：就労支援プログラムに定期的に参加している子がいるということはとても凄いこと。成果として思っただけでよい。これを定量的に参加人数などの数値的な評価をされるのはどうかと思う。つながりが持ちにくい、弱い子たちが定期的に参加していることにフォーカスしている。</p> <p>こうした子たちは、関わりながら戻れる場所が沢山あると良い。子どもたちが選びながら、自分のあったところに行けるのが良い。戻れずにどっかに行ってしまうことが怖いこと。</p> <p>施設職員：「就労支援プログラムきみらぼ」に参加している子どもからは、「楽しい、役に立つ、休みたくない」との声がある。終了後に何か（プレゼント）をもらえることを期待している。子どもと一緒に本事業のTERAKOYAのYouTubeチャンネルを見た。知っている人が出ているので見やすかった。就労支援プログラムがあったことで、子ども2人が定期的に出かけるきっかけになっている。</p> <p>支援機関職員：シェルターを以降もTERAKOYAの職員が関わってくれるのは良い。シェルターを利用させてもらったが、シェルターでの生活に係る食費などが、TERAKOYAの紹介先で「稼ぐ」という仕組みが良かった。自分で働いた分が自分の生活費になるということをダイレクトに学習できることができた。シェルターに入っている間に地域資源とも協力しながら本人を支えてもらった。大人との関係をうまく築く経験が少ない本人にとって、地域の人からの無償の気持ちを受けるのは</p>

		<p>めったにない経験であり、本人にとっては視野が広がる良い経験になったと感じている。シェルターの入居中の情報について支援機関同士で共有しあえていたのが良かった。</p> <p>職員の「若者たちのお兄さん、お姉さん」という感じの関わりが中々大人とうまく関わりを築けない本人たちにとっては関わりやすく、ちょうど良い関係だと感じた。</p> <p>施設職員：就労支援プログラムに参加している本人から「楽しい」「居心地がいい」との話があった。また、支援者としてはサポート体制が整っていたり、経験不足の子にとってバナナジュース（中間就労）のアルバイトはとってもありがたいと思っているとのこと。TERAKOYA 事業で、大人との関わりができるのはとても良いと感じている。</p> <p>支援機関職員：千葉で就労支援をやってくれるのはありがたい。とは言え、社会的養護下の若者は、「働く不安」「新しい人との出会いへの不安」がある。モデル事業で3年間で結果・数字を出さなくてはいけないではなく、「長く続ける」ことを目指して欲しい。まずは安心感を与えられることが必要であり、気長に、ゆったり、まったりと繋がれることが大事である。担当職員が「ゆったり」「気長に」関わってもらえるのがとっても良い。</p> <p>就労支援プログラム協力会社：当初はM&Aに必要な高度な知識を習得してもらい、人材不足及び高度人材を求める企業への就職斡旋を考えていたが、それ以前に<u>若者が安心して通える場の提供、大人と繋がれる場所の提供</u>、「働く」という意識へのアプローチが大切だとわかった。途中で「高度な知識の習得」から「働く」を楽しく感じてもらっ</p>
--	--	---

		<p>たり、「様々な職種がある」こと感じてもらえるプログラムに変更している。</p> <p>就労支援プログラム協力会社：「きみらぼ」に参加してみて、コミュニケーションが苦手な若者がいることがわかった。労働市場では、IT人材不足が顕著である。IT人材の育成プログラムを提供して、人とのコミュニケーションが苦手でも仕事ができる環境を作れると良い。また、補助金事業が終わった後の事業継続でも、IT人材プログラムを一般の人へ提供することにより継続ができるのではないか。</p> <p>内部</p> <p>当法人職員：職業適性診断は魅力的であったのか、検査日とフィードバックの日は就労支援プログラムに参加していた。また、当初予定していた知識、技能を身につけるということよりも、まずは関係性を作りながら、参加してもらうことを優先させる必要を感じている。6ヶ月実施してみて、子どもたちからは、「内容は難しくよくわからないけど、面白い人がいるから参加したい」とのフィードバックをもらった。</p> <p><考察></p> <p>以上のことから、本人たちが、社会に出る上で必要なことは、知識や技能はもちろんであるが、施設を出た後に安心できる場所があるこ</p>
--	--	--

			<p>と、失敗をしても戻れる、戻りたいと思える人や場所があることが大事なのではないか。</p> <p><調査結果></p> <p>以上のことから、事業計画の短期アウトカムにおける、指標設定及び目標値・目標状態を数字で表現することに不具合があることがわかったので、事業計画の「短期アウトカム」の「本事業の支援プログラムを終了した若者が、働く上で必要な知識や技能を有している」の目標値目標状態を変更する。</p> <p>これにより中長期アウトカムとのつながりがロジックモデルでも確認できたので、適切な短期アウトカムが事業計画に組み込まれたと評価する。</p>
<p>実施をおとした活動の改善、知見の共有</p>	<p>活動の中で何が有効であり、どのような工夫・努力がされていたか。また、得た知見を多様な関係者に共有されていたか。</p>	<p>事業として、プログラムなどを提示するだけでなく、ターゲットとしている子どもや若者との関係構築のためのアクションが良かったとの評価を得た。また、当事業の就労支援プログラムの一環の中で、企業とのつながりを施</p>	<p>学識経験者：<u>本事業のシェルター、居場所、就労支援プログラムの中では、「居場所」が最も大切。居場所とは空間や場所ではなく、そこにケアしてくれる人がいることが大事。ケアされて、その後に就労支援である。就労支援も「さあ知識はつけた、いってらっしゃい」ではなく、「一緒に」が大事。企業側にも叱りばなしではなく、「明日も待っているからな」との理解を求めることが必要。就職先も職親のような仕事も生活も丸抱えしてくれるようなところが良い。</u></p> <p>施設職員：<u>就労支援プログラム以外にも居場所として使えるイベントなどがあると良い。一方で、子どもたちと顔の見える関係づくりのために、施設へ来てもらい、関わってもらったことは良かった。</u></p>

		<p>設側に見せたことで、「協力してくれる企業がある」とわかったことは良かった、との評価を得た。</p>	<p>施設職員：<u>本事業を通じて「社会的養護」「若者」をサポートしてくれる企業が、施設が思っている以上にあることがわかった。つながりを作るために施設に来所し、イベントをしてくれたのは良かった。</u></p> <p>支援機関職員：児童相談所の勉強会からの繋がりから、児童相談所でのバナナジュースの移動販売が始まったことは良かった。ここからどう関係を作っていくか。バナナジュース屋で働いている当事者への気遣いが必要と感じている。<u>一時保護所の若者がバナナジュースの移動販売の際に体験できるといい。その際には、販売1週間前に礼節やマナーを学んだ後、実践できるとなおい。</u></p> <p><考察></p> <p>若者との「関係構築」が良かったとの声が多かった。育ちの過程の中で、大人との関係構築が難しい若者が多いのではないか。</p> <p><調査結果></p> <p>上記の結果により、若者との関係構築が必要とわかった。以上より、活動がアウトカム達成に論理的につながることもロジックモデルで確認しており、今後も若者との関係構築を続けながら若者の自信と挑戦意欲が持てるように支援していく。</p>
--	--	--	--

<p>組織基盤強化・ 環境整備</p>	<p>受益者への支援が、突然停止することなく、助成終了後も持続可能性を高める戦略があり、地域で継続した支援が可能かどうか。</p>	<p>助成金終了後の「継続性」については、資金面が心配されていた。資金獲得の戦略をしっかり立て、実行できるフェーズに入る必要がある。</p>	<p>施設職員：不安な点としては、<u>助成金がなくなった後の経済的な基盤をどうするかである。</u>今後、更に地域が無縁化していくことが全国的に考えられる中で、支援が必要な若者という将来性がある存在をターゲットにして、若者の支援をハブにして地域のつながりをさらに深めていくことにつながるため、若者の将来を拓くという意味合いと地域のつながりを濃くするという2つの大きな意義があり、活動が評価され、他の<u>助成金が得られると良い。</u></p> <p>支援機関職員：<u>続けるには、お金が必要である。自主では限界がある。</u>NPO とかは助成金やクラウドファンディングなどでお金を集めている。お金をどうやって集めるかが大切である。</p> <p>就労支援プログラム協力会社：事業継続には資金が必要である。3年の補助事業が終わる前になんとか形にしたい。<u>それには民間からお金を引っ張るしかない。企業とどんどんと繋がり、お金を出してもらえ</u><u>る仕組みづくりを急ぐ必要がある。</u></p> <p>就労支援プログラム協力会社：補助金事業が終わった後の事業継続でも、IT人材プログラムを一般の人へ提供することにより継続ができるのではないか。</p> <p>当法人職員：緊急避難的な若者がシェルターを利用する際、メンタル不調による過剰服薬等の対応をすることがある。<u>資金的にも厳しい状況もあり、職員配置は常勤職員、心理士、無償の法人代表である。</u>人的リソースも限られているために、深夜帯の対応や休日の対応に苦慮することがある。法人全体（他部署の人員を投入して）でのヘルプがなければやれない時もあった。</p>
-------------------------	---	--	--

			<p><考察></p> <p>以上のことから、補助事業が終了した後の事業継続について、内外部共に、資金面の課題が出ており、当初の想定通り、資金獲得が必要ではないか。</p> <p><調査結果></p> <p>上記の調査により資金調達の（活動）を事業計画に追加する。</p> <p>以上より、補助金終了後に事業継続するために関係者で追加となる活動がアウトカム達成に論理的につながることもロジックモデルで確認しており、十分に実施出来ていない資金調達の活動を事業計画に組み込まれたと評価する。</p>
--	--	--	---

② 短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

就労支援プログラムにおいて、参加するメンバーが固定化してきた。毎回参加することで、場所や TERAKOYA のスタッフに慣れてきたこともあり、楽しそうに参加している様子が見てとれる。また、施設から引率してきた職員にも「楽しかった」「また参加したい」との話をしているとの話も聞いた。導入の安心、安全な場所づくりにより、定着が図れた。また、プログラム内に「名刺交換」という時間があるが、回を重ねるごとに自分から名刺交換に行く若者が増えたり、心理士を介してではあるが、今まで講師への質問ができなかった若者が質問をする姿も見られてきた。

③ 事前評価時には想定していなかった成果

就労支援プログラムにおいて、協力会社「株式会社パセリ」が全面協力してくれることになった。また、助成金事業が終了した後の事業継続のための資金面について、一緒に検討してくれることになった。



④ 事業計画の改善の必要性の確認

- 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- 受益者や事業対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇒アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている



事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために <input type="checkbox"/> 事業計画は適切に改善されたといえる <input checked="" type="checkbox"/> 事業計画を適切に改善する見込みがある <input type="checkbox"/> 事業計画の改善について、課題が残っている と自己評価する	実施状況の適正」及び「実施をとおした活動の改善、知見の共有」では、「関わり」についての大切さに焦点が当たっていた。知識的にはわかっていたものの、今回の評価で、改めてその必要さが浮き彫りになった。安心・安全な場所と人を軸に事業を組み立ていく。 ・「組織基盤強化・環境整備」については、法定事業でないところに資金の乏しさがある。行政へのアプローチ、民間ファンド、そして事業実績からの企業へのアプローチをスピードをもって取り組んでいく。

⑤ 中間評価結果を踏まえて今後注力したいまたは早急に取り組みたい事項をお聞かせください。

- ・就労支援プログラムの目的を「知識・技能」第一優先から「つながり」「居場所」へと変更していく。
- ・職業、会社イメージ、働くをリアルに感じるために会社訪問、工場見学等を実施していく。
- ・確実に子どもたちの手元に届く、就労支援プログラム「きみらぼ」の案内チラシを作成し、施設に周知をする。
- ・事業継続を念頭に、2024年1月以降の資金獲得に向け、以下の行動を取る。

- ①千葉市行政とのセッション実施
- ②クラウドファンディングの準備、実施
- ③企業からの資金獲得のために、就労実績を作る

添付資料 活動の写真（画像データは1枚2MG以下、3～4枚）

子どものニーズ調査&関係づくりのための施設訪問

就労支援プログラム「きみらぼ」